



悲しみの道(下)

パレスチナ巡礼⑩

誰の人生でも、悲しみや苦しみはつきものである。しかし、イエスが味わった最後の悲しみの道、ヴィア・ドロソーサほど過酷なものはあるまい。

自分を死刑にする十字架を担がされ、大勢の群衆の嘲(あざけ)りの中を刑場のゴルゴダの丘まで一歩も歩かされたのである。娘と二人でヴィア・ドロソーサを歩きながら、これは作り話ではなく、今から二千年前の歴史的な事実だと確信する。

私が属する下松カト

先日日のミサの原田神

父の話に、その答えをみつけたような気がする。

その日読まれた聖書は「ルカ福音書」九章の一部の、イエスが弟子たちに話された戒めの言葉である。「私について来たい者は自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って私に従いなさい。自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、私のために命を失う者はそれを救うのである」という一節だ。

ルカにとって十字架は自分の弱さや罪ではなく、自分の使命を生きることでと神父は解説する。私は自分の十字架は自分の犯した罪や弱さだと思っていた。使徒パウロは熱心なユダヤ教徒であった時、キリスト信者のステファノを石打ちの刑で殺すよう命じ、その後、改心して使徒とまで言われるようになった。

イエスの亡きながら置かれた聖墳墓教会



パウロにとってこの罪こそが自分の十字架であらう、イエスの十字架上人では外出もままならぬ死で自分も購(あがな)われたと確信し、な体でも希望を持って熱心なキリスト教徒として殉教する。

原田神父は十字架を命の一つと考える。

自分の罪や弱さと思うのはパウロの影響だとされる。それが間違いないという訳ではないが、使命とする方が、自分が前向きに生きているように思える。以来、自分の使命は何だろうと考える。後期高齢者といわれる年齢になつての使命とは。

イエスが歩かされた

使命といえば、何か

大きなことを考えがち

だが、最近、生活の中

の小さなことも自分の

使命と考えられるよう

になった。例えば後遺



毎週金曜日のヴィア・ドロソーサの行進(ガイドブックから)